



# 懸隔 けんかく

## 渋沢の行動原理を知る手がかり

宮本孝一 老年学情報センター

櫻園通信 66 令和3年1月  
東京都健康長寿医療センター  
養育院・渋沢記念コーナー  
連絡先: 老年学情報センター

江戸時代と明治時代の境目、明治維新のさなかに渋沢栄一はヨーロッパにいました。徳川慶喜の弟昭武のパリ万博参加にあたり幕臣として渋沢は随行しました。このとき最も心に残った体験は「外国では**役人と商人の懸隔（けんかく）**が日本の如くでない、是は何とかしなければならぬと云ふ事に気が付た」ことでした。<sup>\*1</sup>

江戸時代、土農工商で商人は最下層の身分。武士と対等に話すことなどできません。ところが徳川昭武一行の世話役の銀行家と昭武の家庭教師をした陸軍大佐はまったく対等の態度で接している。商人と軍人（役人）が対等であることに渋沢は驚嘆しました。

渋沢の実家は染料の藍玉を製造・販売する農家。渋沢も十代の頃から藍の買い付けで商才を発揮していました。そのころ農家・商家に対する武家の理不尽で差別的な態度に強い怒りを覚えました。

明治時代になり、政府の役人を勤めたあと実業家に転身しますが、それを引き留めようとした人に「日本は官吏である

ことを無上の光栄とし、商工業者は蔑視される。自分は商人の品位を高め、商業・商人を社会の最も上流に位置付けた。国家の基礎は商工業にあり、だ。そのため論語を思想とした経営をするつもりだ。」と答えます。

明治の初めまで、渋沢栄一の行動原理は「商人を見下す官尊民卑の打破。商業者の地位向上」でした。封建時代からいまだに残る**役人と商人の懸隔**をなんとかする、とはそういうことです。

懸隔（けんかく）は、現代の言葉ではどんな言葉に当たるでしょうか。それを考えるために次に、渋沢が晩年に使った懸隔をピックアップしてみます。

・殊に工業が段々進むに就て、追々に生存競争が烈しくなりて**貧富を懸隔せしめ**（略）

・物質的の進歩が益々進むとしたならば、**貧富の懸隔**は益々甚しくなることを予期せざるを得ないのである。

竜門雜誌 第一七〇号・第一一一九頁 明治四三年一月 ○慈善事業の過去現在（青淵先生） 渋沢栄一

伝記資料第30巻 p.813

・国民の富力増進に努むる所ありし結果、**貧富の懸隔**著しく、随て貧民は疾病に苦しむ場合にも之を療養する道なきが如きを致せりことを予期せり

竜門雜誌 第二七六号・第四九一五六頁 明治四四年五月 ○恩賜財団に関する協議会 渋沢栄一伝記資料 (DK310009k-0006) 第31巻 p.65

・協調会が大正八年に出来まして、政府も助け資本家も加入して、其協調に努めて居ります。即ち資本家と労働者の協調を図つて居ります。更らに第三には、**貧富の懸隔**を防いで居ります。之は富めるものを貧しくし貧しいものを富まするのでは無く、貧者の懸隔を補ふにあります。之が私の老後国家に対する義務と考へて居ります。

青淵先生演説速記集（三） 自大正十年四月至大正十三年一月 雨夜譚会本 渋沢栄一伝記資料 (DK490210k-0001) 第49巻 p.653

・もう一つは**貧富の懸隔**であります、**此両者の隔離を接近せしめて調和を図つて**行くと云ふこと、即ち純然たる社会事業である。今日は学者間では済民恤救と云ふことは努めて言はぬやうにして居る、是は理論上適當の注意であります。

併し事は矢張濟貧恤救である。現に東京市の養育院の如きは私は明治初年から必要と思ふて、之に関係して最早四十九年目になります。

銀行通信録 第七五巻第四四七号・第一―一三頁大正二年一月 物質界及精神界に対する予の希望 子爵 洪沢栄一 洪沢栄一伝記資料 (DK510003k-0002) 第51巻p.18

貧富の懸隔（または隔懸）… 洪沢栄一の言つ懸隔は現代の**格差**という言葉に置き換えられるように思います。

晩年の洪沢栄一は、社会事業家として、**貧富の懸隔**、現代でいう**貧困格差・所得格差**を憂い、格差拡大への対処に取り組みました。

では、洪沢栄一が考えた貧富の懸隔対策とはいかなるものだったでしょうか。

・貧富の懸隔を融和するといふ、即ち濟貧恤救の事務であります。此救済の事は、動もすると伝説の喜捨となりて、只物を捨て、窮乏の人に施すを主義としますけれども、人道的若くは経済的に言ふならば、単に喜捨ばかりではいけない。

**先づ第一に防貧を努めねばならぬ**と思ひます。斯く論ずると所謂**社会政策**となつて、学者・政事家の領分に立入るかも知れませぬが、貪しき人を救護し又は防貧の措置をすることは、人道上から言つても、政治上から考へても、経済上から観ても、必要欠くべからざることではないかと思ひます。竜門雜誌 第三七五号・第一―一九頁 大正八年八月 ○春季総集會に於て 青淵先生 洪沢栄一伝記資料 (DK42011k-0005) 第42巻p.678

・最も其中にも力を用ひなければならぬと思ひます事は、**既に困難に陥つた場合に之を救ふよりも、未だ其所に至らぬ以前に之を救済するといふ即ち濟貧と防貧との差別でございます**。勿論濟貧を致さねばなりませんけれども、併し望むらくは一步進んで防貧の手段が追々に制度上にも或は地方団体に於ける設備にも、或は個人的事業の上にも進んで参りましたならば、如何に一方からして貧富懸隔せしむる経済上の進歩が働きて行くとも又之を防ぐことが伴つて参りませう。又さう参らせたいと思ふのであります。

慈善 第三編第二号・第四五―五十一頁 明治四四年 本會第四次總會開會の辞（會長男爵洪沢栄一） 洪沢栄一伝記資料 (DK300047k-0003) 第30巻p.453-457

洪沢栄一が院長として養育院運営に関わると同時に事業家として活躍していた頃は「**貧困は個人の責任（自業自得）**」だが、人道として援助は必要だ」という、事後的な救済の必要を訴えていました。洪沢の**濟貧**です。

しかし日露戦争のあたりからは晩年まで、洪沢栄一は**貧困に陥らないようにする社会のしくみこそ第一と唱える**ようになります。**濟貧より防貧**、です。

公利目的の企業家として商人の地位向上↓ 貧窮者を助ける企業家精神↓ すべての人が最低限の生活が確保できる社会づくりの一部としての企業活動、と洪沢栄一の人生哲学は三段階で変化しました。

日本と欧米諸国の比較から見える制度整備などの**懸隔**、あるいは国内の社会に見られるさまざまな種類の**懸隔**を分析することで、洪沢栄一の行動原理は練り上げられたように思えます。